

## まえがき\_「上町台地」とは

「上町台地」は東西及び北の三方を低地で囲まれている。約7000～6000年前の縄文海進の時代には東に「河内湾」、西に「大阪湾」が広がる半島であった。

その後、砂州が北に向かって形成され「河内湾」を締め切り「河内湖」となった。その後、「淀川」「大和川」をはじめとする河川による土砂の堆積によって陸地化が進み、現在は「河内低地」となっている。

古代の頃の「上町台地」も海や湖、湿地、河川に囲まれていた。「大阪湾」側の台地の下の微高地は「難波砂堆（さいたい）」、北側の微高地は「天満砂堆」と呼ばれる砂の堆積地で、陰影段彩図では緑色の微高地となっている。船場、天満など、大坂における江戸時代より前からの町は砂堆上に発展しており、後に「古町」と呼ばれている。

神武天皇の時代、現在の「大阪城」の場所に「生島神」「足島神」の両神が祀られたのが「生國魂神社」の始まりとされている。両神は大地・国土の守護神であり、「上町台地」の対岸にあたる「淡路島」の「国生み神話」とも重ねることもできる。平安時代から鎌倉時代にかけては、両神を祀った「八十島祭」が行われた。天皇の即位の翌年に行われた祭儀で、沿岸の島々を日本の国土である「大八洲（おおやしま）」に見立てて、その神霊を天皇の御衣に遷すというもので、これらの島々は「難波八十島（なにわやそじま）」と呼ばれた。「大阪海岸低地」には現在も「堂島」「中之島」「福島」「江之子島」など「島」のつく地名が残る。

平安時代中期から鎌倉時代初めにかけて、王侯貴族から庶民に至るまで「熊野信仰」が盛んになった。「熊野街道（熊野古道 紀伊路）」は、京都から「淀川」を船で下り、「渡辺津（後の「八軒家）」から「上町台地」を縦断し「熊野三山」へ向かっている。街道沿いには遥拝所と休憩所を兼ねた「王子」（「熊野九十九王子」と呼ばれる）が設けられた。「上町台地」上には五つの「王子」があったが、現在も神社として残るのは「阿倍王子神社」だけである。

「上町台地」の西端は「大阪湾」に沈む夕陽を望める場所であり、「夕陽丘」という地名もある。平安時代、真言宗開祖の弘法大師空海が「四天王寺」から真西に沈む夕日を見て、西方の極楽浄土を観想する「日想観」を行った地であり、その後、浄土宗開祖の法然上人も「日想観」をこの地で修し、その草庵が現在の「一心寺」となったという。

戦国時代に築かれた「大坂城」は、「上町台地」の北端部分に位置し三方は川や湿地と、天然の要害で囲まれていた。唯一、南に続く台地面が弱点とされ、大きな「空堀」が掘られたほか、「大坂冬の陣」では出城の「真田丸」も築かれ守りを固めている。「茶臼山」は、5世紀の古墳といわれており、南にある「河底池」は、8世紀ごろに「大和川」や「河内湖」の水を排水するための水路を掘削しようとした工事の跡という。現在の近鉄南大阪線の駅名に残る「河堀口（こぼれぐち）」という地名もこの工事に由来する。

